

『新選組展2022』を見学して

2022.9.27 高橋 眞

はじめに

今年 8 月、会津に帰省した際に、『新選組展2022』を見学しました。内容は盛りだくさんで、出展された史料の数も半端なく多く、とても半日では消化しきれないものでした。写真1はパンフレットにまとめられた展示の概要です。第1章「京都守護職と多摩の草莽」で近藤勇らと会津藩主松平容保が会うところから、第5章「土方歳三の新選組と会津戦争」で近藤勇を失ってから、新選組が各地を転戦するまで、そしてエピローグでは「それぞれの戦後」として激しい戦いを生き延びた斉藤一などの隊士のその後を紹介しています。

全体としては、とにかく新選組と会津に関する史料を全国から集めるだけ集めて、それを新選組と会津というテーマに沿ってまとめた、という感じでした。そして何より、主催者の意気込み、会津藩と新選組両者に対する思い入れ、といったものをひしひしと感じました。

ここでは、『新選組展2022』を見て強く印象に残ったもの、流山に関係するものを中心にまとめてみました。(写真2は今回出品された「出品リスト」の一部です。出品された史料は全部で226点もありました！)



写真1. 『新選組展2022』パンフレットより



写真2. 『新選組展2022』出品リストの一部

1. 近藤勇自筆の漢詩書、書簡などの展示 (特に印象深かった4点)

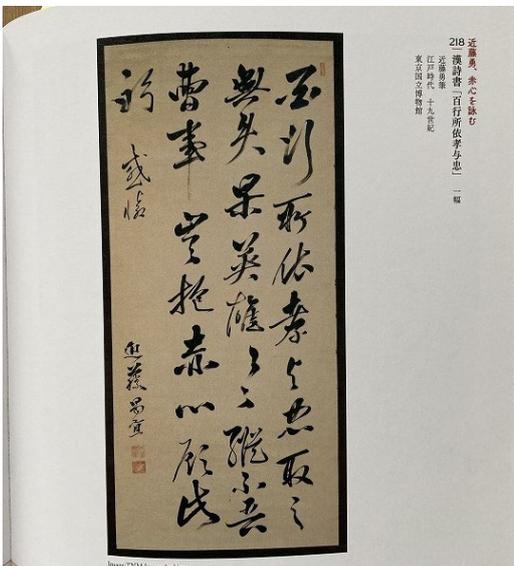


写真3. 近藤勇筆漢詩書「百行所依考与忠」

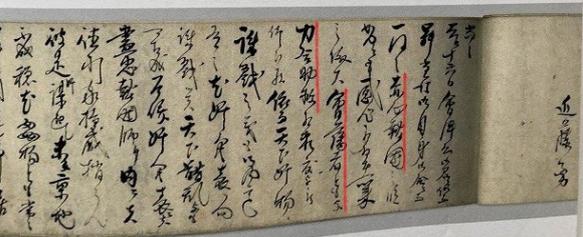
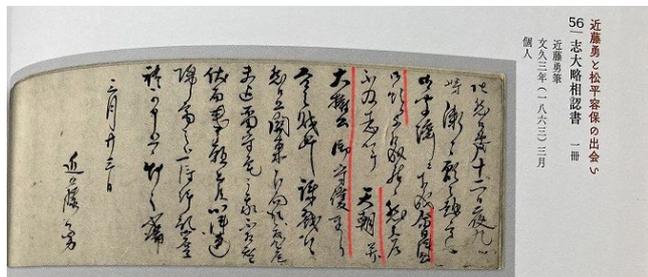


写真4. 近藤勇筆「志大略相認書」文久三年三月

展示会の会場入口を入ってすぐ、目に飛び込んできたのが、写真1の近藤勇筆による大きな漢詩書だった。近藤勇の書を見るのは初めてだった。近藤がこのように達筆だったことにまず驚いた。東京国立博物館蔵となっていたが、『公式図録』によれば、「元会津藩医馬嶋瑞園が東京帝室博物館に献納した書幅の中の一冊」で、軸裏に「従友人原政房求 戊」と伝来が書かれているが、原政房なる人物は不明とのこと。

『新選組展 2022 公式図録』（以下『公式図録』）によると、本漢詩の全文は以下。「百行所依孝与忠、取之無失果英雄、英雄縦不吾曹事、豈抱赤心願此躬」。展示の説明文では、「すべての行いの動機は『孝』と『忠』で、両方出来るのが英雄であり、もし自分は英雄でなくても、赤心（まごころ）は抱いていたい」という意味とのこと。次に写真4。近藤勇筆の『志大略相認書（こころざしたいりやく あいしたためがき）』で、「京都で松平容保の預りとなって京都に残留することになった経緯を、多摩地域の仲間たちにあてて報せた書簡。近藤勇の政治思想や力量が記された最初の史料」（『公式図録』より） 本史料の内容については、『公式図録』の解説文から抜粋して、少し長くなるが引用する。「近藤は京都残留の経緯について、当時の京都の治安が非常に悪く、奸人が横行する有様だったため、これらを成敗してご奉公したいと願ひ出た。聞き届けられなくても、京都で牢人となって『勤王攘夷基キ捨命可仕与覚悟』（勤王攘夷に基づき命を捨て仕えるべくと覚悟：筆者）していたところ、松平容保に聞き届けられ、預かりとなることが決まった。容保と面会した際には赤心報国の志を訴え、感心されたという。以後『会藩者とも力を合せ助救相頼み度く』と会津藩士と協力するよう依頼された。本書簡に記された近藤の上京目的は、将軍が孝明天皇に攘夷を約束し、将軍を中心とした攘夷戦争に自身も従軍するというもので、将軍より天皇を上位に置いたうえで将軍を中心とした攘夷の実現だったことがわかる。（略）以後、近藤は京都での活動の様子を詳細に多摩の仲間に伝えている」（『公式図録』より）

写真4の書簡原文は達筆で私にはほとんど読めないが、それでも「会津公御預かり」、「天長並に大樹公御守護奉り」、「赤心報国」、「會藩者とも与力合助…」(赤線部分)などは読みとれる。ここでも、先の写真1の漢詩にあった「赤心」という言葉が出てくる。

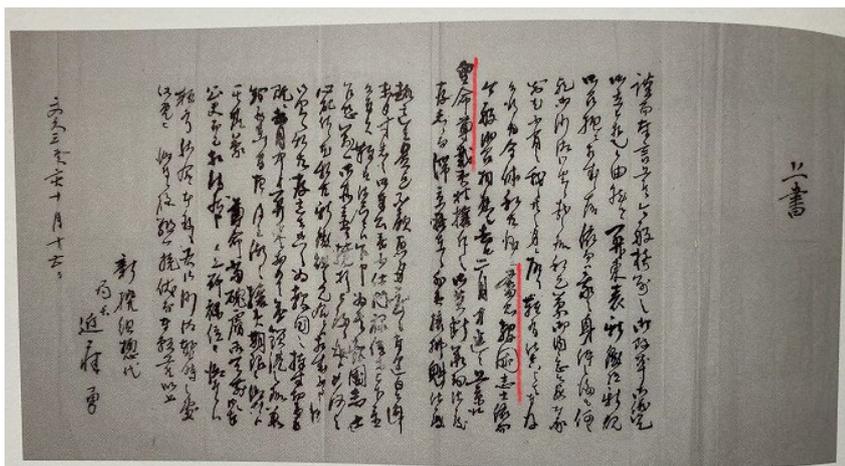


写真5. 「近藤勇上書」文久三年十月

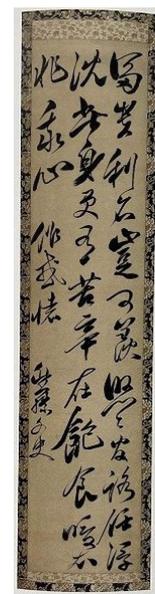


写真6. 近藤勇筆漢詩書「富貴利名豈可羨」

上記写真5は、「八月十八日の政変」の後、新選組の名を与えられた近藤が、幕府からの取り立ての打診を断る口上書。近藤は自分達は「尽忠報国志士」であり、「天皇の命を受けて攘夷戦争に臨むことを目的として京都に滞在して活動しているのであり、攘夷実現までは幕府から禄位を受けることはできないと述べている。新選組の目的が明確に記された重要な史料である。」（『公式図録』より）

写真6は、近藤勇が新選組結成当時の心境を詠んだ漢詩。郷里の支援者である小島鹿之助に贈られたもので、小島資料館蔵。読み下し文は以下。「富貴利名は豈羨む（あにうらやむ）可（べ）けんや 悠々として官路は浮沈に任す 此身更に苦辛有るに在り 飽食暖衣は我心に非らず 感慨に作る 近藤外史」（多摩デジタル新選組資料館/新選組関連資料より）ここでも近藤は「悠々として官の路（新選組の任務）はその成り行きにゆだねる。私の身に苦しく辛いことがあったとしても、飽食暖衣（身にあまる贅沢をすること）は私の心ではない」（同上より）としており、「私利私欲を捨て去って奉公に臨む心境を表している」（『公式図録』より）

ここまで、近藤の書や書簡などを見てきたが、まずはその達筆さ、『公式図録』では「能筆」という表現をしている説明文もあったが、国立博物館に所蔵されるほどの書を書いていたことを全く知らなかったのも、本当に驚いた。また、内容をみても自分自身を律する行動の規範を、孝、忠、赤心、報国、無私といったものに置いていたということが良く理解できた。私の近藤勇に対する見方は今回の展示会で大きく変わった。

2. 「流山」に関する史料の展示2点

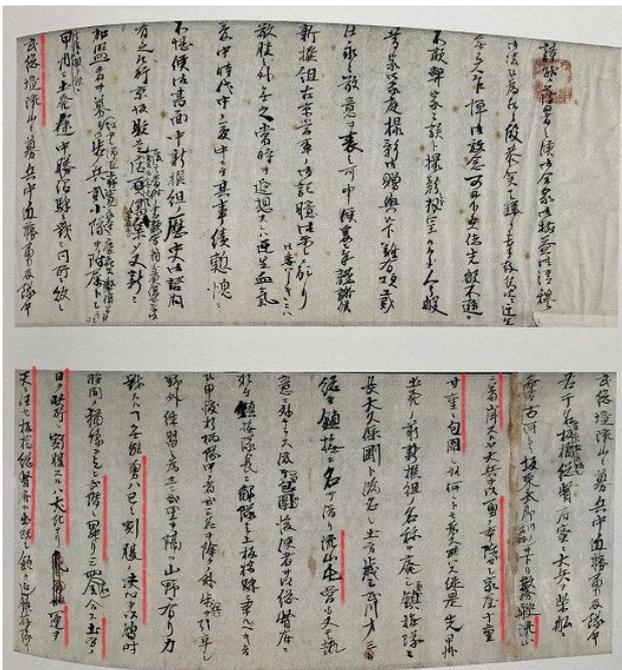


写真7. 近藤芳助書簡「新選組往事実戦譚書」（京都府立京都学・歴史館蔵）



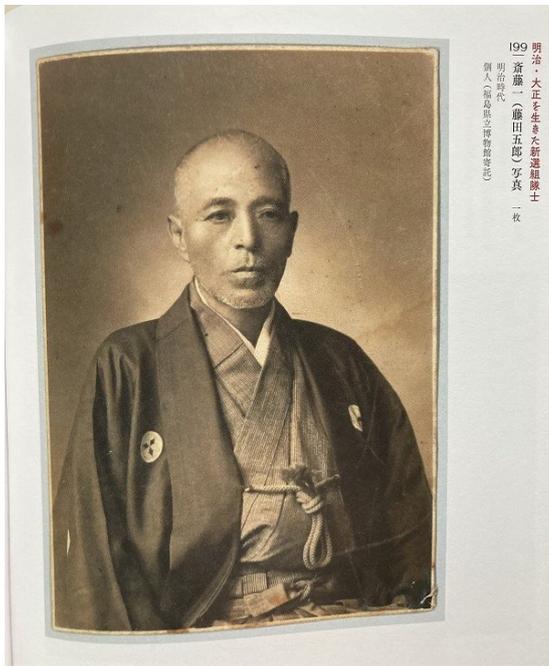
写真8. 近藤勇処刑瓦版（小島資料館蔵）

写真7は、新選組の隊士であった近藤芳助（川村三郎）が、明治39年頃に往時を思い出して書いた書簡。書簡の前半部分に、流山の陣で新政府軍に包囲された状況や、近藤と土方のやりとりが記されている。赤線を引いたところに、勝沼での戦いの後、流山で、「板橋総督府」の軍に「十重二重に包囲」され、近藤は「割腹の決心」をしたが、屯所の「二階に昇り」土方が「ここで割腹するは犬死なり、運を天に任せ板橋総督府に出頭し、あくまで鎮撫隊・・・」の記述がみられる。（尚、本文書はその後「瀧乃川」で斬首され、京の「加茂川原」に送られたところまで記されているが割愛した）（上記内容は『公式図録』の説明文から引用）

写真8は、小島資料館蔵の「近藤勇処刑瓦版」、展示では近藤の処刑に関連した史料として、他に佐藤彦五郎新選組資料館の「説夢録」、霊山歴史館蔵の「近藤勇首級図」も展示されていた。上の「瓦版」に描かれた近藤の顔は、目じりが下がって何となく情けない感じになっている。意図的にそうしたのかもしれない。

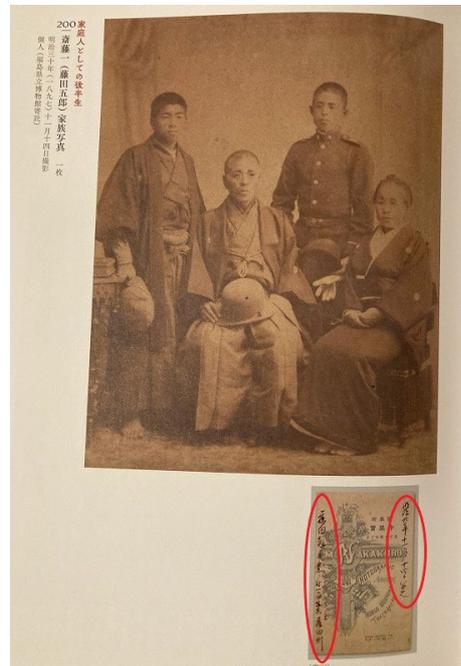
3. 斎藤一に関する展示

『新選組展2022』のエピローグは、「それぞれの戦後」となっていて、島田魁、永倉新八などの日記や書簡、回想録や写真が展示されていたが、大きくスペースを取っていたのは斎藤一。



明治・大正を生きる新選組隊士
199 斎藤一（藤田五郎）写真 一枚
個人（福島県立博物館寄託）

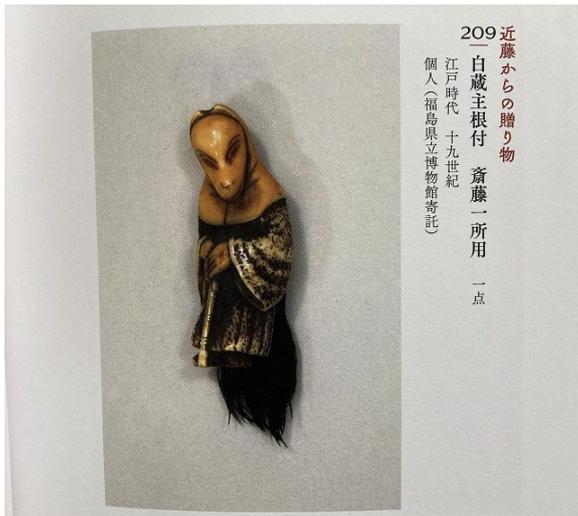
写真9. 斎藤一（藤田五郎）写真



200 斎藤一としての晩年
斎藤一（藤田五郎）家族写真 一枚
明治三十二年（八月）七月十四日撮影
個人（福島県立博物館寄託）

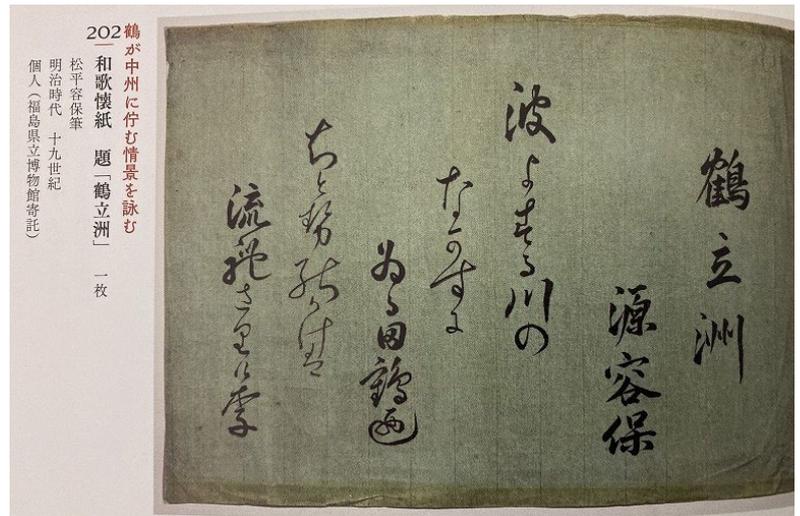
写真10. 斎藤一家族写真（明治30年11月14日）

上の写真9は、斎藤一の写真。隣の写真10は斎藤一の家族写真。時尾夫人と長男勉、次男剛に囲まれた斎藤一。この家族写真の裏面に「明治卅年十一月十四日」「藤田勉卒業に付一家写真 藤田剛」の墨書があることから、明治30年に撮影されたのは確かなようだ。写真9の斎藤一だけの写真は、撮影年月日は特定されていないようだが、家族写真の中の斎藤一と風貌が近いように見える。『公式図録』では、「家族写真の後に撮影されたようにみえる」としている。



209 近藤からの贈り物
白蔵主根付 斎藤一所用 一点
江戸時代 十九世紀
個人（福島県立博物館寄託）

写真11. 近藤から贈られた「白蔵主根付」



202 鶴が中州に住む情景を詠む
和歌懐紙 題「鶴立洲」 一枚
松平容保筆
明治時代 十九世紀
個人（福島県立博物館寄託）

写真12. 松平容保から贈られた和歌「鶴立洲」

写真11は、近藤勇が斎藤一に贈ったと伝わる根付。「白蔵主とは、僧侶に化けた狐で、狩猟が好きな男に殺生の罪を説いて戒めたという伝説をもつ。近藤はどのような思いから白蔵主の根付を選び、斎藤に贈ったのだろうか」（『公式図録』説明文より） 写真12は、松平容保が斎藤一に贈った和歌。「波よする 川のなかすに ゐる田鶴の ちとせのかけは 流れさりけり」明治時代に贈られたもので、「斎藤一が会津藩関係者と交流を続けていたことが窺える」（『公式図録』より） 確か松平容保も明治の一時期、東京に住んでいたと記憶しているが、斎藤一と東京のどこかで会ったりしていたのだろうか。激動の幕末を生き抜いた斎藤らの「戦後」はどのようなものだったのか、彼らにとって戊辰戦争とは何だったのか、考えさせられる展示会のエピソードだった。

4. 刀の写真について（特に印象に残った3点）

今回の『新選組展 2022』には、刀剣が何点か展示されていた。印象に残った刀剣を3点紹介する。

まずは、今回の展示会の目玉の一つでもあった、「土方歳三が愛用した会津の刀 和泉守兼定」（写真 13）。土方歳三資料館蔵。会津の刀工十一代兼定の作。「和泉守兼定の初代は室町時代の美濃国に居住したが、四代目には奥州会津にわたり、以後当地の刀工として作刀した。本作は慶應三年二月の銘をもち十一代兼定とわかる。（略）歳三が 箱館で戦死するのは明治二年五月のこと。本作を佩用（はいよう）したのはわずか一、二年の間に限られるが、遺品として子孫に届けられた際には実戦で用いられたことが明らかな使用痕が確認されたという。（『公式図録』より） 私は刀のことはよくわからないが、『公式図録』の説明では「詰んだ小板目基調に全体に柾目がかり、刃文は貴重を三本杉にしなごら頭を低く揃え、物内付近で互の目を明瞭とさせる」ということらしい。

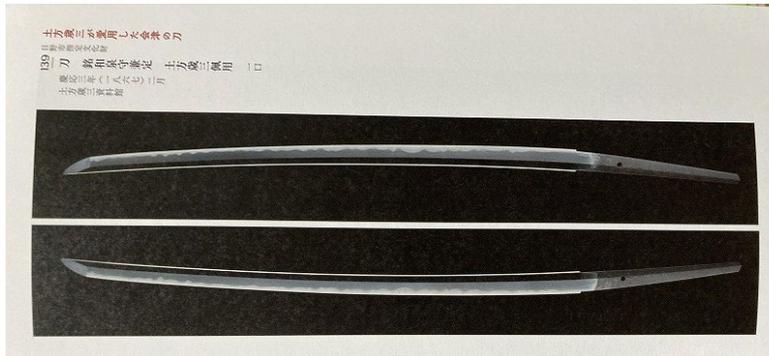


写真 13. 土方歳三愛用の和泉守兼定



写真 14. 松平容保が孝明天皇から拝領した短刀

写真 14 は、松平容保が禁門の変の褒章により孝明天皇から賜ったもの。「元治元年十月二十五日、関白二条齐敬が会津藩家老の神保内蔵助を呼び出して与えた。永田習水斎による桜に離れ駒の高蒔絵があしらわれた鞘や後藤光文の金具を用いた拵（こしらえ）を併せて賜ったが、拵は太平洋戦争で焼失して現存しない」（『公式図録』より） 拝領した際、容保が大変喜び感激した様が想像できる。そして終生大切にしていたと思われる。

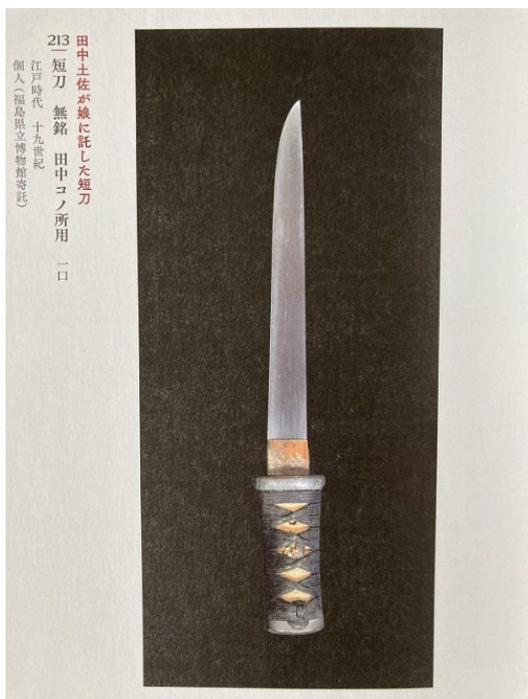


写真 15. 「田中土佐が娘に託した短刀」

最後に左の写真 15 は、戊辰戦争の際に会津藩家老田中土佐が 長女コノに持たせた短刀。「田中は若松城下に戦火が及ぶことを想定して、娘を会津から脱出させることにした。コノに短刀を渡す際、『何かあったらこれで喉を突くように』と言い含めたという。田中はコノを見送ったあと、八月二十三日に始まった若松城下の戦いで戦死（負傷後に自刃）したため、再会は叶わぬものとなった。

コノは炭俵に隠れて運ばれ、会津から三浦半島の 浦賀へと落ち延びた。七歳頃の少女にとって、不安な道中だったことは想像に難くない。（略）コノは地元の名士小川茂周に匿われ、大切に育てられた。また嫁ぎ先の浅羽家でも『会津藩家老の姫をお迎えした』と 大事に扱われたという」（『公式図録』より）

会津藩の藩士の家庭では、田中コノのように「何かあったらこれで喉を突く」ということが実際に行われて、西郷頼母の家族などのような悲劇がたくさん起きた。何故そこまでするのか、サムライとは何なのか、サムライの家族の人達は何なのか、その答えがこの短刀を見て少しだけわかったような気がした。(そのため、田中コノの短刀の写真はやはり縦にするべきと思いきやスペースはとるが縦にした。他の刀は横にしたが、これは単に長かったため) 田中コノは、のちに横須賀の商家浅羽家に嫁ぎ、二女一男をもうけたが、明治34年、39歳の若さで亡くなった。長女ユキは、そのときまだ9歳。のちに長女ユキは、斎藤一の次男、藤田剛と結婚する。(この結婚式の集合写真も展示されていた) 斎藤一はその時69歳。その2年後に東京の自宅で亡くなった。

おわりに

今回『新選組展2022』で、強く印象に残ったことを、「近藤勇の書」、「斎藤一の戦後」、「刀剣」の三つにまとめてみました。その他にも新選組ファンや新選組に関心のある人なら見入ってしまうような史料がたくさん展示されていたと思います。私自身、これまで新選組についてはあまり興味はありませんでしたが、史跡ガイドで勉強する中で少しずつ興味がわいてくるようになり、さらに今回の『新選組展 2022』で、新選組や近藤勇に対するイメージがかなり変わりました。今後のガイド活動にも活かせたらと思っています。

尚、本企画展示は、10月1日から11月27日まで京都文化博物館で開催しています。秋の京都見物に組み入れてみてはいかがでしょうか。

